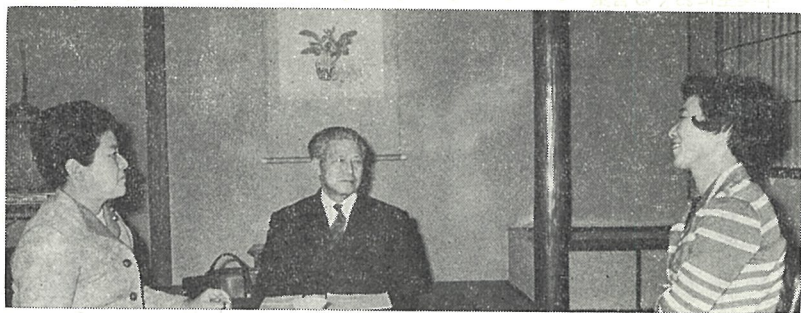




(左から戸叶里子氏・住谷悦治氏・土井多賀子氏)

1970年2月9日・東京お茶の水にて

女性と政治・社会

——同志社教育をふりかえりつつ——

総 長 住 谷 悦 治

衆議院議員 戸 叶 里 子

(女専・昭4卒)

衆議院議員 土 井 多 賀 子

(大法・昭26卒)

同志社の政治家

住谷 それでは、はじめたいと思いますが同志社から出た政治家としては同志社の社長をした片岡健吉とか、西原清東、これは明治三十年代、同志社の非常に困難な時、徴兵猶予の問題で、同志社の理事会が真っ二つに割れてしまった大騒ぎして、滅びるかどうかというぐらいの事件の時、西原さんが政治家として官庁にも非常に顔が広いので、大隈内閣の時でしたか、出向かれて、いろいろ斡旋し

たりされたわけですね。それはキリスト教の看板をおろせば徴兵猶予を許してくれる、というような問題であって、キリスト教は精神的問題だから、看板はおろさなくていいんだとか、おろしてもかまわない、というような意見も相当強くて、非常な論争があったんですが、その問題をおさめたのが、西原清東です。この時は伊藤博文なんかも出てくるわけです。大隈内閣が、アメリカとの条約の問題で困っていた時で、アメリカンボードと同志社とが訴訟問題を起すようになったらたいへんだということですね。弁護士をたのんで問題を起しそうになったので、大隈内閣も非常に弱った。

そのほか、われわれがよく知っている人では、安部磯雄とか、あるいは永井柳太郎、それから深井英五なんかは、日銀総裁ということですけれどもやはり政治的な勢力というものは隠然たるものがあつたと思いますし、市原盛光なんかも、第一期の卒業生として、のちには勸銀の総裁なんかしましたが、この人もそういう政治的力のあつた人ですね。

でも、だいたい実業家とか官吏というのは同志社からは少なく、政治家として名前が



戸 叶 里 子 氏

あげられているのは相当ありますけれども、有名な人はわりあい少なく、だいたい社会事業の方面、あるいは教育界、牧界に出るといのが、同志社の特徴だったわけですね。

そこで、戸叶さんは、十一回も連続当選の衆議院議員ということで、同志社としても非常にハナを高くしており、肩身の広い思いをわれわれしているわけですが、ことに外交問題に関しては、国会でも戸叶さんに期待するところは多いわけですね。そしてこんどは幸いに、土井さんが、同志社の憲法の先生であるのに、すずんで政界にご出馬になったということ、戸叶さんの後継ぎもここにできたというわけなんです。女性が代議士というものが、それ自体国会の中で異色であ

るということでありながら、同志社出身の議員が二人も出たということは、同志社としても非常に誇りをもっているわけです。

そんなわけで同志社精神、同志社の建学の精神というか、設立の精神というものが同志社教育の根本ですけれども、そういうような問題を実際に政治的な活動をしていかれる時どういふふうに自覚されておられるか。そういうことについておっしゃっていただくと、同志社の男性ばかりでなくして、女性についても、一つの明るい将来が開けるといふようなことが考えられます。そこでまず、政治の世界に出られた動機といいますか、それを戸叶さんから最初にお話いただきたいと思えます。

「無の強さ」からの出発

戸叶 私は、同志社の英文科ですから、政治学を学んでいないわけなんですよね。ところが私自身同志社におります時には、だれにもいわなかったんですけれども、日本に婦人の外交官というのが一人もいない、それで私は、同志社を卒業して、なんとかして婦人外交官になってやろう、というような大それた

考えでございました。そんなわけで卒業してから、アテネフランセに行つてフランス語の勉強をしたりしましたけれども、たまたま結婚をいたしました、主人が政治学をイギリスで勉強してきて、政治家を志していたものですから、年中人がくるわけですね。主人が、「君、ここに来て話の仲間に入れ」というような調子でしたので、政治というものをどんどん、叩き込まれるようにして頭に入れてきたわけです。そして上海に行きまして、新聞記者をしまして、そんなところからそろそろ、政治というようなものに少し目覚めてきたわけです。

そしてこんどは、戦争でもって家がすっかり焼かれてしましまして、なんにもなくなつて、その時に私はフツと悟ったことがあるんです。ちやうどその時に主人は中国に行つていたんです。それで私は子どもと、二日ほど前に死んだ母親のお骨とを、防空壕で抱いて考えたことは、なんにもなくなつたんだから戦争が終つたら私は何かできるんじゃないかということ、で、「無の強さ」というものをその時感じたんです。それから間もなくして、三カ月後に戦争が終りましたので、何かしな



土井多賀子氏

ければならないという気持が、だんだんに盛り上ってきたわけです。

そして、八月に終戦になって、十一月に婦人参政権の問題が出てきたわけです。私たちの先駆者が一生懸命闘って、婦人参政権獲得に骨折って下さった。それが実って、参政権が獲得できたわけです。そして私のところでは、主人が政界に出ようとしていたんですけれども、ちょっと青年の運動をしていたというところで、パージにひっかかりそうになったわけなんです。そうすると近所の人や地域の人、郷里の人がみんな集まって、婦人参政権が獲得できたのだから、ご主人が出ないのならば、奥さん出なさいということになったわけなんです。

それで私はその時に考えたんですけれども食べるものがなくて、着るものがなくて、住む家も不自由して、戦争中から戦後、非常に苦勞したわけですね。そういう中において子どもを育てるということで、あっちのお百姓さんところに行っではお米を買い、こっちのお百姓さんのところに行っではおいもを買いしていた。ところが一方においてヤミ屋さんは、トラックでもってどんどんお米を運び、お酒を運んでもうけて贅沢している。しかしほとんどのお母さんたちは、子どもに食べさせるものをなんとかということで、農村に買出しに行っ、電車の中などで疲れきってよたよたになっている。私もその一人として、そういう情景をいつも見ていたわけです。そしてこんな不公平な世の中であっていいものだろうか、苦しめる者、悲しめる者をもつと幸せにするのには、個人の力ではできない、政治の力でなければならないということを考えまして、幸い婦人参政権が獲得されたから、みんながすすめるならば、よろしい、出ましよう、ということになって、立候補したというようにききさつがあるわけです。

住谷 ありがとうございます。

土井さんはこれまで同志社の先生であつたし、いまもまだ先生をされているわけですが、教師から政界に出られたという、そのへんの動機というのはどういふことなんでしょうか。

法律学から政治に……

土井 政治家になりたくて出て、婦人代議士になられたという人は少ないと思うのですね。私も、政治家になりたいとは、ついこのあいだまで考えていなかったんです。けれども、やはり法律を勉強してきたでしょう、だからその点からいふと、まんざら無関係ということではないのです。でも、同じく法学部に学んでいても、同志社以外の大学で私が学んでいたら、はたしてこうなったかどうかということは疑問だと思ふんです。と申しますのは、同志社に入る以前に、私、田畑忍先生の講演を聞きましてね、それは、憲法第九条の平和主義の講演だったわけですが、たいへん感銘を受けたわけです。以前から、弁護士になりたいということで法学部に行きたいということは、思っていたわけですから、法学部に入るのならば、同志社に、と思った



住 谷 悦 治 氏

んです。それで受験に來まして、学校の門をくぐったとたんに、大きい碑がありますでしよう。

住 谷 「良心の碑」ですね。

土 井 「良心の全身に充滿したる丈夫のおこり來らんことを」というやつですね。あれを見まして、ほんとうに期待に胸がふくれる思いというのは、ああいうことをいうのだからと思ひますけれども、ああこの學校に來てよかったな、と思つたんです。そしてなんとかパスしまして入学して、それからあとは、田畑先生の憲法学にたいへん期待をかけたんです。そして、司法試験の勉強しないと、当初私が考へていた弁護士になれませんから、学部の間中それを考へたんですが、私、生來

喧嘩好きでして、少し向う見ずのところがありますから、やつておりますうちに、あたえられた法律を、解釈だけでこなしていくということになんか我慢ができなくなつたんですね。それで、どうしてこんなものが作られたのか、なんのためにこういうものが必要なのか、ということに疑問を感じじますと、そちのほうで自分にとっては大事な問題になつてしまひまして、司法試験ということからはなれていったんです。

その間、学生時代に、いま宗教センターになつてゐる場所に、女子学生のたまり場が當時あつたんですが、そのたまり場を獲得するのに、学生部とかけ合つて、大喧嘩をやつたという経験があるんです。それはこれだけ女子学生がふえてゐるのに、女子学生のための施設がないなんていうのはどうかしてゐる。大学として当然そのくらい考へて当り前だ、ということでも闘争をやつたんです。これは、司法試験の勉強をしようという者にとつては、たいへん困ることなんです。だから、だんだんとそれから方向がずれ、そのうち大学院に行くようになって、専門的に憲法の本なんかを読み出しますと、学部とちがつ

て、そのことに對して一途に勉強するというのが機會に恵まれますから、興味を感じまして、これは面白い、ということになつたんですね。それで、氣が付いたら、いつの間にか、憲法の研究をやるということになつていたんです。

それで田畑先生は、いつごろからか知りませんが、大学院を出てしばらく経つてからでしようか、私に、政治家になれなれと、しきりにおっしゃるということがあつたんです。私が、田畑先生からその声を聞きましてから、もう五、六年は経ちますね。政治家になることを、あなたは努力して考へなさいということなんです。それで当初私は、いやですといったんです。そうしたら、それは努力しないとそうならない、好きな人には言わなかつたつてそうなるんだけれども、あなたはそうなりたいて考へていないから、私はわざと努力せよといつてゐるんだ、絶対なりなさいということなんです。絶対ということばをつけていわれるんです。私はほんとうに困りましたけれどもね。でも私が憲法の勉強を続けている間に、一九六〇年以降いろいろ地域で、憲法を守るといふ運動が起つてきま

して、「憲法を守る」という、兵庫県での運動の事務局長ということで推されましてやっている間に、あっちに行って話をし、こっちに行っている座談会をやる、という機会がたくさんになってきたでしょう。それでそういう方々から、実践運動も大事だけれども、直接、憲法を守るというのを、われわれの代表として、国会で活躍するということで考えてみてはどうか、ということもあったんですね。だから私は自分で、そうなりたいたいと思っただけではなくて、なんだかあたりの情勢から、止むにやまれずそういう具合になったということがいえると思うのですね。

もう一つは、一九七〇年というものを目前にしての選挙で、いわゆる安保選挙でしよう。いままで、憲法を守る運動を続けてきている一つの結実を、ここではっきり呼びささなければならぬということを考えましてみよう。この大事な時に、どうだ考えなさい、ということ言われて逡巡している時ではないと思っただけですね。だから、もう飛び込むというのを、いさぎよく決意したわけなんです。けれども、これは私の人生を賭ける問題でございますから、いままでのコースから百

八十度の転換といってもいいわけですし、大問題なんで、実はいまから思うと、それは決心するまでにはずいぶん時間をかけました。ああでもない、こうでもない。はたしてできるかできないかということに對しても、私は自信がほんとうのところありませんから、それにはずいぶん時間をかけましたけれども、やっと決心して飛び込んでからあとは逡巡はありませんでした。それは、もう船は岸を離れたわけですから、出た以上は当選しなければということ、全力投球をなんとか自分なりにやっただけなんです。

住谷 お二人の方が、政治に関心をもち、政界に入られる動機については、非常に感銘深く伺いました。同志社の教育とやがて結びつく問題ですが、戸叶さんが戦後の荒廃の中において、貧しい者、働く者の味方として立ちとうという、そういうことに踏み切られたというお考え、これは私はある意味で、非常にヒューマンだと思うのですね。それから土井さんが、憲法第九条の問題、ことに平和というような問題について、田畑さんの話に共鳴し、しかも試験受けに来た時に「良心の砦」というものによって感銘を受けられたと

いうことですね。私はこの「良心の砦」こそ、新島先生の精神、あるいは同志社精神だと思うのです。それは、良心を手腕に運用するということは、政治の世界に立つ人が、良心を政治に運用するということになると思うわけで、感銘深く伺いました。戸叶さんは、貧しい者のため、労働者のためということ、これまで働いてこられたのですが、それは戦争の体験、戦後の体験によるんでしょうけれども、たとえば、栗原基先生に興味をもたれたとか、教えられたとか、あるいは柳宗悦先生の影響もあるとか、それから、ミス・デントン先生——平和主義者で、戦争中においてもアメリカに帰られなかった。これらの人々は同志社の精神、あるいはヒューマンニズムの問題と非常に関連のある、あるいは香りの高い一つの存在だと思っておりますが、その点について、何か思い出というようなものがありますでしょうか。

同志社のヒューマンニズム

戸叶 私は、いまおっしゃったように、議員としての活動に踏み切っていかうとしたことの中には、ヒューマンニズムというものがこ

の世の中からなくなったらいけないということとを、強く感じたということがあるんですね。だから、私いまでも社会党に言っていることは、社会党が一番ヒューマンでなければならぬのだ、それにもかかわらず、いま一番欠けているのはヒューマニズムなんだ、ということ声を大にしていっているんですけれどもね。その教育は、どこで受けたかといえば、やっぱり同志社の教育だと思うのです。同志社で、私たちはヒューマニストでなければならぬという、こういうことを叩き込まれてきたわけです。たとえば、その一番

最たるものが、ミス・デントンですよ。ミス・デントンは、もうほんとうに自分で苦労をされて、絹の靴下をはかないで木綿の靴下をはいて、絹の靴下を売ってもそのお金を学校に寄付するという、そういう社会をよくしようという気持ですよ、それから電車に乗っても男立ちます女座ります。といって、荷物を持っている人、老人、子ども、女、そういう弱い者をほんとうにいたわるといふ気持ですね。そして戦争中、アメリカ人は敵のような扱いを受けても、帰国しないで、星名先生が苦勞をして、自分の家のまわりに野菜

を作って食べさせて、それで残っておられたということ。そういうふうなものが、私の中にすっかり叩き込まれていたんじゃないか、ということとを、卒業してから私は強く感じています。これは同志社のおかげだということで、ほんとうに嬉しく思います。

それと、やはり私たちが同志社にいる時には寮にいましたから、寮にいますと、朝、チャペルに連れていかれる。それで、なかにはサボる人もいますけれども、押入れの隅までも開いて、ピックアップするようにして連れいかれたんですけれども、当時においてはそれはいやでした。しかし、あとから思うと、やっぱり私たちが、いつでも静かにものを考えて、良心に恥じない行動をとるといふことを教えられたものですから、いつの時も私は混乱した時には、良心に恥じない行動をとろうということを考える時間をさっともてる。そういう習慣を、同志社によって与えられたんじゃないかということを感じております。同志社にいる時は、あんまり同志社のありがた味なんていうものは感じませんでしたけれども、卒業してからいろいろ、同志社でよかったなということを感じております。

新島先生の良心と勇氣

住谷 お二人から、政界出馬の動機についてお伺いして、私非常に心強く思うのですが、おっしゃるとおり、新島先生は、良心をもって、そして勇氣をもって実践してこれたわけでございますね。私は、新島先生の性格については、いろいろな方面から考えられると思いますが、新島先生の勇氣というのが、ほんとうにわれわれに生甲斐を感じさせたと思うのです。若い時に、死を決して函館から脱出したということも一つの勇氣です。すなわち断じて行なうも勇なり、だけれどもまた、断じて行なわざるも勇なり、ということですね。たとえばアメリカに行っている時に、森有礼から、国を脱出したんだけれども、そんなことは問わないから、文部省の留学生になれ、ということとで要請があったのを——当時、外国に行った人は、帰ってくればすぐいい地位になる。森有礼なんか、外国に行ったために、二十五、六歳で公使になるということだったのですが、その森有礼が新島先生を信頼して、敬服して、留学生になれ、ということとをいったのを断るわけですが、

ね。自由教育、キリスト教教育をするためには、文部省のお金で留学生になると帰ってからも東縛を受けるんじゃないか、官僚として束縛を受けるんじゃないかということで、断るわけですね。地位、財産、名誉が目の前にぶら下っているのに、それを断るということは、非常な勇気が要することですね。

それからもう一つは、新島先生が日本に帰ってきてから、仏教徒や、神道、一般市民が、ヤソ教に反対する京都において、しかも御所の裏に同志社を断固として作ったということ。これも非常に勇気があることなんですね。

それからまた、当時苦勞した時に、田中不二麿という文部大臣が、同志社なんか作らないで、文部省に出てこいといったのに、二晩泊り込み三日に亘って口説いたのに、それも断ったということで、非常に新島先生は、あらゆる面において、勇気をもってやってこられたということです。これは、新島先生の根本に、ヒューマニズムというものがほんとうに生きておったんだ、というふうに私は感ずるんです。

先生から得たもの

戸叶 栗原先生の講義は、なかなかいいものでしたけれども、講義よりも栗原先生はよくシェークスピアを教えて下さったんですけれども、そのあとから、人生はこういうものであるというような、人生の話を必ず講義のあとでなさるんですよ。それがとても印象に残っていました。あたたかいものを感じさせられました。それで私は、先生になるんだったら、こういうあたたかい先生になりたいな、というふうな気持ちを抱いたもんですから、それで先生には私淑して、亡くなられるまで、お手紙をいただいたりなんかしております。

それから、柳宗悦先生のほうは、やはり、よく英詩を教えてくださいって、ブレークのものをよく教えていただいた。その中に私たちが豊かな人間性というものをもっていかなければならないということを、そういうことではないですけれども、話の中に伺えるものを、この二人の先生から、私はたぶんに受けたような気がいたします。これは授業を通してです。それから、ミス・デントンの場合に

は行動を通してですね。私達の頃は先生に恵まれておりまして、ほんとうに生徒一人一人を愛情をもって育てていこうというような気持ちで、叱られもしましたし、ほめられもしました。

私はあまりほめられたことはなくて、叱られるほうが多かったですけれどもね。(笑)それが、ひどく私たちの胸に響いております。さつき土井さんが女子学生の控室を獲得するために闘ったとおっしゃったんですが、私たちのクラスも激しいクラスだったんですよ。一度、満州旅行がしたかったんですね。

ところが、なんか学校の規則で、旅行というのは十日しかいけないとかなんとかいうのがあるんです。そんなら夏休みにでかけたらいいじゃないかと思ったら、そんなに遠くへ行っちゃいけないという。遠くへ行っちゃいけないということはいいでしょうということ、先生と談判して、とうとう満州旅行を成功させたようなことがあるんです。たいへんうるさ型の人がずいぶんいたクラスだったわけですね。

住谷 同志社教育というものが、そういうふうに、現在への道を切り開く動機になったということは、その意味では、理論とか思想

が実践に移ったわけですが、同志社教育との結びつきが、そこに、はからずも出たのでありがたいと思いますが、土井さんの場合には、大学の入学試験を受ける時に、「良心の碑」を見て、感銘したということですが、これは、受験生としては非常に珍しい例なんですね。入学してから、あそこに行ってみろ、という人ばかりですけれども、受験生が、あの碑を見て、良心云々ということばをつかまえるということは、ほとんど私はいままで聞いたことないんですよ。それから、土井さんのころはおそらく、平和非戦の問題がやや一般化しているし、そういうところに、田畑さんの話はあるように厳しいお話ですから、たぶん田畑さんとの切磋琢磨というのがあったと思いますがね。そういう、実践へ乗り出す基盤といいますか、精神的基盤というか、そういうことについて、なにか同志社の学園生活における精神的なものはいかがでしたか。ゼミナールなんかどうだったんですか。

土井 私、ゼミナールは、法学関係ではなくて、政治学を受けただけです。それはむしろ単位のうえからいうと、特例でしてね。法

律学専攻と、政治学専攻と、法学部は二つに分れておりますでしょう。それで法律学専攻のほうは、原則として、政治学のゼミナールは受けられないんですよ。だから、単位を認めてもらうために、私はまた談じ込みに行っただんですが、当時私は、与えられた法律解釈ではなしに、その法律の根本問題というのに興味をもっていましたから、やはり政治学のゼミナールをとくに受けたかったというので、受けさせてくださいましたね。

ですから、いまから思うと、まあその当時から、政治に興味があったといえますが、関心があったということは事実だと思っております。とくに私が学部を出て、大学院に入りますところからそろそろ世の中が騒然となっていましたね、学生のデモだとか、それから授業放棄などというものも、そろそろ出かけてまいりましたから、その渦の中で、やはり、それにもまれるということはありますし、当時私は、自治会の委員をやっておりまして、ので、それに対してどうしていくかということとを、やっぱり意志決定しなければならぬ一員でしたので、そういう意味では、たいへん鍛えられたということは、いえるかと思ひ

ますね。

住谷 お二人とも、教養とか、思想、学問というものが、けっきょく政治というものに結びついて一般的に実践的な問題と結びついたということについて、動機その他、たいへんよくわかりました。

女性と社会

そこで次に、「女性と社会」というのですか、女性として政治家として立っているということは、職業ということと、生活というのが、ここで結びつくわけでありませうけれども、政治家ばかりでなしに、社会的に一つのボランティアとしての性格というか、地位と私は感じているんですが、そのボランティアとして、社会に対して、女性が立っていく時に、苦労などがどんなところにあるかと、矛盾を感じているかということ、何かご感想でもありましたらば……。

戸叶 あね、これは私と土井さんとはちがうんじゃないかと思うんです。というのは、バックがだいぶちがいますよね。私が政治家になったころと、それから今日では、少し変わってきておりますね。私のころは、婦人

が解放される途上であって、婦人参政権をはじめて獲得した時ですから、当時はもうほんとうに、婦人が政治家になるということは想像もつかないことだったろうと思います。ところがそういう中で立って出て、国会だつたたいへんな騒ぎでしたよ。いまはもう亡くなつた大政治家ですけれども、その人がエレベーターの中で、私が今日演説をするという時に、「戸叶さん」といわれたので、「何ですか」といったら、「女はしゃべるもんじゃないよ、国会なんかに来て。きれいな風でもしたらいいんだよ」といわれて、私はなんのために国会に来たんだろうと思つて、ものすごく腹立たしかった。それから、世間の目も婦人代議士というものを特別の存在に見えますから、箸の上げおろし、洋服の着方、モンペ着てきたとか、そんなことばっかり批評して、もうほんとうに辛かつたですね。そして、二度、三度ぐらいまでの選挙のころは、同じ選挙区の人が、女なんか国会に出したつてお茶くみしかできませんよ、という演説などしていたわけですね。そういう中で私はよかったですね。自分でいま思いますね。振り返つてみて、よく当選してくれた

と思つて、選挙民に感謝しております。そのころは、どんなに私が働いても、そういういい方をされました。そういうふうなことで、はじめのうちはずいぶん苦労しました。しかしそれが、四度、五度と選挙を経て出てくるうちに、情勢もずつと交つてきて、官庁にも女性の局長ができてくるし、社会でいろんな女の人が働いてくるということで、婦人代議士も必要だなということを、ようやく認めてくれるようになった。そして世間でも、つまらない男の代議士より、婦人のほうがいい、ということをしてくれる人も出てきて、私も、少しはよくなつてきたな、ということを感じてきました。しかしそれまでの間はほんとうに苦労だつた。しかも、私は土井さんとかがつて、家庭をもつており、子どもをもつてましたから。私の子どもは大きくなつていましたから、託児所の必要はなかつたんですけれども、いちおう、ちゃんと留守をしてくれる人とか、託児所とか、そういうものが必要というものを、身をもつて感じました。もっとも私は、結婚してすぐから働いてましたから、そういう経験を通してやっぱ子どもをあずかつてくれるような託児所がな

ければ、婦人が社会的に伸びようと思つてもできないんだ、というようなことで、そういう経験が全部、国会にいつてから役に立ちました。

それから、最初のころは、演説なんかに行つても、男の人ばかり集つて、農村においては女の人が出てこようと思うと、お前なんか話聞きに行つて少しぐらい利口になるんだつたら、足袋のつぎでもしてろ、ということで行かしてもらえなかつた。という時代があつたわけですね。それがだんだん交つてきてようやく認められてきたわけですね、しかし、都市と農村とを比べると、農村にはまだ封建的なものが残つていると思います。しかし、戦後、二十年経つてきて、ずいぶん交つてきた、進歩してきたということは感じますね。でもまだ男女差はある。たとえば、職場においても、同一労働同一賃金ということは言われておりまして、まだ婦人はなかなか係長にもなれないとか、そういう悩みをいまでも聞いています。だから、こういうふうなハンディがついている社会を、もっと私たちは一生懸命になつて、なくしていかなければならないのではないか、ということをやまだ

に感じています。

住谷 これに対しては土井さんなんかは、学者として立つというのは、これはすんなり、頭がよければなれるわけで、たいしたことでないのに、親御さんも賛成されるだろうと思いますけれども、政治家になるという、これはまたちがった世界ですから、ご両親とか、ご親戚など身内の方々は、どんなふうにお考えでしたか。なにかそういう点で抵抗はありませんでしたか。

婦人議員の役割

土井 私の両親というのとはもと、放任主義と申しますか、とにかく自分のことは自分で道を切り開いて責任をもてという主義でございまして、大学に進学する際も干渉いたしませんし、何学部を選ぼうとそういうことに対しては文句をつけませんし、やった以上はとことんやりなさい、ということで見えてくれないわけです。ですからこんど決断するのも、親にはいちおう相談はいたしたけれども、両親からの注文があって、ということは一切なかったんです。けっきょくは自分自身の問題だから、自分で納得のいくま

で考えなさい、しかし一旦決めたら、そのあとはあなたの問題だから、責任をはっきりもちなさいよ、ということでした。ですから決断してからあとは、それはもう決断したんだから、勝たなきゃウソだということで、そういう激励はしてくれましたけれども、なんらそれ以外に口をさしはさむということはございませんでしたね。だから、そういう点では私たいへん恵まれていると思います。

それと、戸叶先生が、ご家庭をおもちになっっている、ということがございましたが、それに対し私は家庭人じゃないというようなことで、条件のちがいをおっしゃいましたが、もし私が家庭をもっていましたら、こうはならなかったと思います。私ぐらいの年では、おそらく子どもが一人、二人はあるでしょう。それで主人がいて、ということになりますと、これは実際問題として、いくら決断をしるといわれても、物理的条件としてむりなんです。ですから、そういう点ではむしろ、ひとり身でいたことが、こういうことになってきたというふうに、私自身思うんですけれどもね。ただ出てくる時に、地元のある方が「国会に婦人議員がせめて五十人いたら

な」とおっしゃったんですよ。五十人という数はけっして多くないけれども、それは、婦人議員を見ていると非常に清潔で——汚職で、婦人議員が問題になったためしがないし、もし婦人がそんなことに名を列ねるようになったら、もう世も終りだ、というふうな感覚がみんなの間にある。それくらい清潔だということで、女性に期待することが絶大だし、さらに女性は、思い込んだら命がけ、ということがありますので、一旦こうと思ったらあとに退かないでしょう。

戸叶 そう、とことんまでやりまからね。

土井 だから最後のねばりというのは、男性なんか、とてもとても足元にも及ばんという意味で、女性に対する期待は非常に強いわけですね。だから、いまの国会に五十人婦人議員がいたら、日本の国会もがらりと変わります、日本の政治もそのことにおいて変わるんじゃないかということをおっしゃって、だから、その五十人をつくるのには、一人一人婦人議員が出ていかなければウソなんで、あなた頑張ってくださいよ、とおっしゃる方がありまして私はたいへん勇気づけられました。

戸叶 それはいいことだと思えますね。だ

んだん婦人議員の数がへっているんですね。こんどの選挙で七人が八人になりましたけれども、そのへんをうろうろしているだけでしよう。選挙という試練が非常に大きな試練ですから、なかなか出られませんが、しかし、やっぱりいまおっしゃるように、婦人というのはものすごく責任感が強いし、やろうと思ったらどこまでもやっていくというところがあるんで、こういうふうな婦人が、ある程度出ていかなければいけないと思うんですね。私は、土井さんとは環境がちがうけれども、私は幸い恵まれていて、やっぱり、とことんまで主人が、婦人解放のためにやりなさい、ひるんじやいけないというふうに激励してくれているんで、やりいんです。子どももまた協力をしてくれている。その点では、同じように恵まれていると思うんですね。それで、自分の体験を通して生活問題とか、託児所の問題とかを、国会にこれまで反映してくることができたわけですからね。やっぱり、ある程度の条件と、それから本人の意志力がなければできないですよ。

土井 それはありますね。ただ、女性が議

員として頑張る時に、男性とちがった意味で頑張れるというのは、私思うんですけれども、やはり経済力からいまして、社会的地位からいまして、男女差は歴然としてあるわけでしょう。それで、いつも弱い立場に立たされて、いつでも日蔭で、押えつけられて暮ってきたものが、一番世の矛盾というものに敏感でしょう。だから、それに対してどういふふうに受け答えをすべきかというのは、非常に痛いところを一番鋭く衝くという力をもっている私は思うんです。

戸叶 そうです。そうです。

土井 だからそういう点からしますと、私政治というのは、一番困っている人に、一番あたたかい手を……ということが考え続けられなければいけないと思っています。そうではないと民主主義もへたつくれないと思うんですね。

戸叶 そうそう、それで最初の中から私のスローガンは「愛情の政治」ということなんです。やっぱり同志社出た人でなければ、愛情の政治、なんていうことはいえないと思うのです。ところが、「愛情の政治」という時に、最初に私がそれをいったらラジオの

「私たちのことば」でさえも、「婦人議員で愛情の政治なんて、生やさしいことをいってやるやがっている、けしからん」という投書が出たんですよ。しかし今日では「愛情の政治」ということをいわない人ははいんですね。

住谷 私も婦人の解放とか、自覚に非常に関心もっているんですが、明治三十三年です。か、治安警察法第五条は、婦人は演説してはいかん、あるいは集会を主催してはいかん、聞いてはいかん、ということでした。

それが大正八年頃、私大学にいる頃、「新婦人協会」、その前には平塚雷鳥の青鞥社がありましたし、私が大学の時に「新婦人協会」が、治安警察法第五条撤廃請願運動をやったんです。それで、婦人が演説会をやるというのでなんだろうと思って、私聞きに行ったんですよ。そうしたら久津見房子さんとか、塚本はま子さんとか、堂々と演説やるんですよ。それで驚いて、えらい女の人がいるなと思いましたが、神田美土代町の青年会で、新婦人協会が演説会やったんですね。ところが聴衆はほとんど全部男なんです。そして野次が入るんです。たとえば久津見房子さんが、着物で壇上に立つでしょう、そう

すると「よおし、別嬪さんしっかりやれ」と野次飛ばすんですね。そうすると壇上から怒って「なんという下品な野次を飛ばすんか」といって、野次ったほうに向って怒鳴りつけたところ、シーンとしちまいましたがね。えらい女性がいるものだと感じました。その時代からすると、いまはまだ婦人議員は少ないですけれども、隔世の感があると思いますね。しかし、外国と比べれば、なんといってもまだまだですね。山川菊栄さんが、社会党内閣の時に、婦人少年局長になられたけれども……。

戸叶 そうですね。それ以来ずっと婦人少年局長は婦人ですね。

住谷 こういうところをきっかけにして、将来、婦人の方が、衆議院議長でもなんでもやるようになったら、官界はもちろんだけれども、政界にとつては影響力は大きいと思いますね。ほんとうに私は、婦人の方に期待してるんですけれどもね。

土井 よい前例を作るとあとが続くんですね。

戸叶 だから、私も副議長に推されましたから、当選したらよかったのに、当選しな

ったから悪いんですけども、一つの歴史を作ったことになると思うんですね。

住谷 だから私は、ボランティアだといっているんですね。ほんとうに、ボランティアとしての意味があると思いますね、いまの婦人代議士の方々は……。

そこでまた話は同志社に戻るんですけども、同志社の教育というようなものと、現在のお仕事とはいかがでしよう。外部から見られて、同志社に、もっとこうしてほしいとか、先生たちが受けられた同志社の教育、それといま外部から見られた、同志社ばかりでなく、一般大学の教育という問題について、現在のお仕事との関係で、いかがでしょうか。先輩としての教育についての考え方というものがございましたら簡単に……。

≡boys be Ambitious≡

土井 これは、先生もおそらくお感じになっ
ていらっしゃると思うんですけども、三年
もちがえば、ずんと、学生の感覚はちがっ
てきますね。三年とはいわない、このごろ
なにか一年ずつちがうみたい、私は思うん
です。ですから、このところ十年ばかりの間

私大学院出て教壇に立つようになってから、同志社もずいぶん変ってきたなと思うので
す。学生の大学に対する、とくに同志社に
対してどう考えているかという考え方は、ずい
ぶんちがいますね。私見ておりまして、一つ
のことに一生懸命打ち込むという、そういう
気魄というものが、だんだん欠けてきている
ような気がするんですよ。だから、ことなか
れ主義というようなものが、非常に強く出る
ような場合がありますし、それからマイホー
ム主義ですかね、そういう気風が非常に強い
ように思うんですね。ですから卒業しまして
からもいいところに就職できた、やれやれ。
課長になれた、やれやれ。これで自分は、功
成り名遂げたような気になっちゃって、これ
でいいんだというようなことで、なんだか夢
のない、大きい希望もない、そういう意味
で、人生に対する欲という語弊があるかも
しれませんが、大きな望みというものが少
なくなったということです。

住谷 いま、マイホーム主義の話が出まし
たけれどもね、先年同志社で二十人の学生を
とって調査したんですね。その時の結果は四
七・五パーセントが個人幸福型、マイホーム

型なんです。それから、人を押しのけてもという立身出世型が二パーセント、それから社会改良型といったものが二パーセントなんです。社会改良型には社会政策から、社会福祉から、共産党まであるでしょうけれどもね。そういうふうな型をとるということには問題があるかもしれませんが、だいたいそういう結果が出ているんですね。マイホーム型というのが半分近くあるわけなんです。

土井　なんか使命感がないんですよ。

戸叶　使命感がないし、それから、例のクレークの、ボーイズ・ビ・アンビジャス、ということば——少年よ野心を持て、ということじゃなくて、大きな志をもて、ということだと思ふのですね。やっぱり、ああいう精神というものは、最近どこにも見られなくなっているんじゃないかと思って、私は悲しいですね。そういうことというのは古臭いといわれてもいいから、やっぱりそれを教育していかなければいけないのではないかと思いますね。

土井　ですけども、どうなんでしょう、このごろ入学してくる学生の中で、同志社だ

からくる、という学生がどのくらいございましてしょうね。

戸叶　そう、そこなよ問題は。だから、しょうがないですよ。同志社だからくるということで来た学生でなくてもいいから、私はなにかをもたせて卒業さしてもらいたいと思う。社会に出て、なにかの時に必ず同志社を思い出すようなものを叩き込んで卒業さしてもらいたい。そのためには、先生と生徒が、もっと人間的な話し合いをしていくということ、これは私は非必要だと思うのです。

住谷　ごもっともですね。私は去年、大学紛争の最中に河野密君に会ったんですよ。河野君は以前、同志社の教授してましたからね。それで私に、「住谷君、学校はずいぶんあっちこち紛争しているけれども、同志社はいいんだね」というから、「どうしてだ」といったら「とにかく創立精神がはっきりしている。創立精神がはっきりしているから、学内の建直しとか、努力ということについて、目的がほかの学校よりは強いんじゃないか、はっきりしているからやりいんじゃないか」ということをいってくれましたが、その点はそうだと思いますね。

いたるところに

同志社のいいものが……

土井　だけれども、大学至るところに、そういう雰囲気はつくろうとしたらあるんですね。たとえば、明徳館の入口の上に書いてあることはなんていうのは、あれはヨハネ伝の中から引いてあるんでしょうけれども、「真理は汝等を自由ならしむる」という、それがラテン語で書いてあるんですね。あれなんかも読んで、あれはどういうことかと見ている学生はそういなかもしれないけれども、そういう立学の精神なんかというのは、ちゃんと校舎に刻まれているわけなんです。それから校歌ですが、あれは英語で、いやだなと思ってたけれども……

戸叶　いい歌じゃないの。

土井　そうなのよ。第三章あたりにくると、私の同級の学生の中には、涙を流す者がいましたよ。

戸叶　実がいい。

土井　徹底平和主義ですものね。

戸叶　ただ、いまの学生が、非常にせせこましい社会に物質的な社会に動かされちゃっ

て、スーッと入ってくるものだから、土井さんのような眼でそれを見ようとしなない。全部開いてなんでも受入れようというような気持ちで学校に入っていないかなければいいものはいってこないと思うんですね。だからいまの学生も、いいものがたくさんあるんだから、それを同志社から吸収しよう、という気持ちで、私は是非勉強してもらいたいと思う。至るところに同志社のいいものがあるんだから、そういうものを受入れるというオープンな気持ちでいかなかったら、どんないいことだ

って入ってきませんよ。先生のほうは、ほんとうに、なんか一つの筋を通した生徒をつくるということ、こういうことが私はほんとうに望ましいと思う。私たちこの二人が、ともかく政治家になったということは、だれでもやろうと思えばできるんだという、一つの道を開いたことだと思うんですよ。

土井 新島先生が期待かけられたのは、やっぱり、同志社から学者も出、宗教人も出、いろいろな人が出ることを期待されたけれども、政治家もその中には入っていたわけでしょう。

住谷 そうそう。あくまでも、国家社会に

貢献する、有用な人物を輩出するということをお願いしているんですね、新島先生は……。

戦後世代との断絶

戸叶 もう一度そういう精神を強く掲げて、そしていまの学生に訴えていく必要がありますね。ただね私ほんとうに心配なのは、同志社が、平和の精神に徹底しているということ、私なんかもそれを叩き込まれているのでいいんですけども、平和という問題一つ考えても、いかに時代の変化があるかというところで、私つくづくこのごろ悲しく思っているんですがね。私自身は、戦争でも叩きめされた中から、ほんとうに強く、なんにもないところからたち上ってきた人間ですね。そして政治家になってきたわけですし、土井さんも、戦争の苦しみというもの、いくらかは味わっているでしょう。ところがいまの二十代の子は、戦争の苦しみというものを知らないんですね。だから、ちょっと軍事的なものなど見ると、カッコいいといったあたり（笑）、平和というものの必要性がわからなかったりですね。私、こういうのはどうやって教育していくのかな、ということ

を、考えますね。私たちが、平和は大事だとか、平和憲法を守らなければたいへんだとか、戦争はこういうものでこわいものだ、ということ話をしても、ピンとこない青年層があるんですね。これをどうしたらいいかと思つて、私は実はいま悩んでいるんですよ。

若い人たちに話しても、平和なんていうことが、ピンとこないんですね。これをどうやって教育し、どうやって社会の一員として育てあげていったらいいんだろうか、ということを考えて、断層を感じちゃうのね。戦争を経験した人たちと、経験のない人たちとではこうもちがうかと思つて、ほんとうにいま悩みをおぼえているのよ。一生懸命になつて、平和憲法を守りましょう、平和な日本を作りましょうといつてみたつて、よそごとのように思っているんですね。それから教育にたずさわる先生方に、私は考えてもらいたいと思いますのは、やっぱり、いろんなすべての教育者というのが、新島先生のように、一人でも悪い子ができれば、自分に鞭うつという、ああいう気持ちで教育にたずさわっているかどうかということですね。

住谷 そういう点で創立者が非常に立派で

あったということですね。しかし新島先生がいくら立派であっても、けて偶像崇拜はしないということですね。それを以前ですが、学生がちよつと見当ちがいで、私のところに、新島先生の銅像を建てよう、と盛んにいつてくるんですね。大隈公の銅像もあるじゃないかというようなことで。それで私は、銅像は建てない、「良心の碑」はあるし、先生の遺物はたくさんあるし、言行録もあるし伝記もあるし、なにも銅像を建てる必要はない。銅像をいま作って、偶像崇拜になってはいかんということですね。

戸叶 かえってみじめですよ、そういうのを作ると。精神が流れていればいいわけですからね。

住谷 幸いにして、いままで先輩が、その精神に則って、ずいぶんいい活動してますからね。そういうことがわれわれの励みになるんですね。

同志社への期待

最後に、いまでも出ましたが、同志社に対して望みたいこと、同志社には十の学校、共学大学から、女子大学、高等学校、商業高

等学校、幼稚園まであるんですね、女子中高校もあってないのは小学校ですが、全体についてでも、あるいは共学大学についてだけでもいいんですが、いかがでしょうか。

土井 日頃私は、田畑先生の感化を受けておりますから、多分に理想主義型人間になっているんですがね、同志社を見ました場合、やっぱりこれは日本の、私立大学の一つのモデルケースを作っていく存在になってほしいな、と期待することが山ほどありますね。たとえば、学費を非常に安くして、そして私学の経営を健全なものにしていくという、モデルを一つやってみたって、これはもうたいへん、いまの日本の大学制度に与える影響は大きいと思いますね。これはなかなかむずかしい問題でしょうが、やろうと思えばできないことではないと思うのですね。学費を思いきり安くして、しかも健全な経営をやっていくということ。学費を安くしますと、あらゆる面でいい点が出てくると思うのですよ。学生もどつといいのが入ってくる。

戸叶 ただ、その場合、どうやって経営を立てていくの……。

土井 経営については、それはやはり国家

で助成をするということをもっと考えるということですね。ただ、そこにもっていくのは、学費値上げさえすればなんとか経営が賄える、という姿勢をとったら絶対だめですよ。値上げというのは押えないと、国庫助成するということにはいかない。値上げすればいいじゃないかといわれる。しかし、憲法において、教育については、機会均等ということが保障されていますね。能力に応じて、やっぱりそれだけの権利というものが確保されるということを考えなければいけないという。そういう問題があるわけですからね。

住谷 それでさっきいわれた、私学の一つのモデルケース、そうならいいと思いますね。なんといっても官立が教育の中心で、私学というのはその付属物とされてきたわけですよ。日本の場合、教育としては、私学がどんどん発展して、人数が多くなつて、もう七〇パーセント以上が、私学を出て社会で働いてるわけですからね。そういう点からいえば、政府ももっと積極的に補助していいわけですよ。

戸叶 やっぱり、私学をよくしていかなければならないと思いますね。その私学をよく

するのは、経営が成り立つようにしなければならぬ。経営が成り立つようにするのは、国がもっと、私学に対して力を注がなければならぬ。私たちはやっぱり政治家になった以上は、やはり私学振興のために骨折っていきましようよね、これから。それでさっきおっしゃったように、同志社を私学のトップのレベルに置きたいというのが私たちの願いなんですよ。だから、理想をもったいい学生がたくさん出てきて、社会の各界において役に立っていくというような、そういう基盤を作る大学に、私は是非なってほしいということを望みますね。私たちは、ほんとうに私学振興のために、政界にあって力を入れていきたいと思っています。

それと私は、同志社出身の人が、最近はいぶん関東のほうにも来て働いていらっしやるけれども、どうも関西に集まり過ぎちゃっているの、もう少しこっちの東のほうに、どんどん進出してもらいたいと思いますね。

住谷 どうも金沢、名古屋、あのへんが一つの線のようになってますね。西は、広島、松山、高松というあたりですね。

戸叶 たとえば学校にも、もっと地方から

いくようになればいいんですけどもね。たとえば関東など、群馬県は特別の関係があっていきますけれども、栃木県なんかは、はじめは三人ぐらいだったんですが、それがいまは七十人にもなってきたというのは、こういうことも一つの同志社というものを認識させることにもなるんですけども、音楽会を開くということですね。そういうことで、同志社ここにありということをや、やっぱりある程度示していった方がいいと思います。あの音楽会が来たおかげで、栃木県ではいぶん同志社が認識されました。グリークラブが来てくれていますね。校友は骨が折れますけれども、またそれが一つの楽しみですし、同志社にとってもプラスになることですからね。

土井 夏休みに音楽会も催されるし、講演会みたいなものもありますし、移動法律相談みたいなものもやっておりますね。ああいうのはずいぶん宣伝にもなるんですね。

戸叶 なりますね。一番宣伝になったのは音楽会でしたね。庶民が中に入れますからね。法律相談も少しはありましたけれどもね。無料法律相談、あれはだいたい家庭の主婦

が喜んだみたいです。

土井 法学研究会の先輩に寄付を募って、それを資金にして出発するわけなんです。それで毎年夏休みになると奉賀帳がまわってきますよ。

戸叶 学生の自動車旅行もありましたね。自動車の横っ腹に、同志社大学自動車部と書いて。まあ大いに発展してもらいたいですね。

土井 それから、卒業してから、先輩がいるところはわりあい行きやすいものだから、ルートがつけられているところはずいぶん就職していくんですが、そうでないところには案外行きたがらないでしょう。その点で、パイオニアというのは、どうしても必要だ思うのです。だからどしどし、いままで行っていないところに行ってもらいたいですね。

戸叶 そうね。

住谷 それでは今日はこのへんで終わらせていただきたいと思います。本日はほんとうに参考になる、有意義な話を聞かしていただきましてありがとうございます。